都留文科大学 同窓会報

第33号会報

発　行　都留文科大学同窓会事務局
責任者　日向哲男
山梨県都留市田原３-８-１
☎0554-43-4341

大学創立60周年を機にさらなる発展を

都留文科大学同窓会長

亀田　孝夫

全国３万人の同窓会員の皆様には、ご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。また、日頃より本会発展のためにお力添えをいただいておりますことに心よりお礼申し上げます。

昨年は、青色発光ダイオードの発明で、ノーベル物理学賞を赤﨑勇氏、天野浩氏、中村修二氏が受賞し、日本社会が沸き立ちました。また、ＡＣミランの本田圭佑選手、ＡＴＰランキング５位の錦織圭選手、ソチオリンピック・フィギュアスケート金メダリストの羽生結弦選手、スキージャンプワールドカップ個人総合優勝の高梨沙羅選手など、若者の目覚ましい海外での活躍は、子どもたちに夢と希望を与えてくれました。一方、戦後最悪の火山災害となった御嶽山の噴火、過去30年間で最多の人的被害をもたらした広島市の豪雨による土砂災害では、多くの尊い人命が失われました。犠牲になられた方々に哀悼の意を表するとともに、救助や災害復興に献身的なご努力をなされました同窓会員の皆様に敬意を表します。今年は、東日本大震災から４年目になりますが、被災地ではいまだ復興途上にあり、福島県では原発事故による帰宅困難地域が設定されたままで深刻な状況は変わりません。災害に遭われた方々の心は癒やされず、継続的な支援が求められています。

本年度は、都留文科大学同窓会にとって記念すべき年になりました。昨年暮れの12月13日に京都府支部が、新年の１月10日に滋賀県支部が設立されました。両支部とも情熱的な大先輩の発起人を中心に、事前打合会の開催・支部規約の作成・支部組織の編成・文書発送などの支部設立総会までの周到な準備や、配慮の行き届いた総会運営をして頂きました。総会後の懇親会では、都留での大学生活を懐かしく語り合い親睦を深める姿に接しました。同窓会支部は、47都道府県設立まで今一歩の所に参りました。同窓会では、昨年度から、支部未設立県の支部設立を支援するための専任理事を設けています。支部未設立県で支部設立の活動ができる方は、ぜひ同窓会本部へご連絡下さい。同窓会本部が支部設立に一緒に取り組みます。一報をお待ちしております。

さて、都留文科大学は、本年、大学創立60周年を迎えます。大学は、創立以来着実な歩みを積み重ね、初等教育学科・国文学科・英文学科・社会学科・比較文化学科の５学科、大学院５専攻をそなえるに至りました。学生と先生方が自然豊かな落ち着いた環境の中で良き関係を築き、学問研究を究めています。初代学長諸橋轍次氏が定めた学訓「菁莪育才」の姿です。その成果が、合唱団においては、全日本合唱コンクール６年連続金賞・文部科学大臣賞を受賞、陸上部では、日本ジュニア陸上競技選手権大会女子100ｍで優勝、日本学生陸上競技個人選手権大会女子1500ｍで準優勝という成績に表れています。

福田誠治学長は、「氷河期から淘汰の時代」にある激しい大学間競争の下、大学の教員養成系というブランドの強化、中学校免許教科の増設、グローバル人材の育成（国際交流の強化）等を提言しています。その具体策として、来年度の大学創立60周年を機に、国際交流会館（仮称）を建設し、留学生と日本人学生との交流によるグローバル人材の育成を図ります。また、キャリア支援センターの充実、教職支援センターの設置等様々な施策に取り組み、教員志望者だけでなく、公務員・企業就職を目指す学生の就職率向上を図っております。

都留文科大学同窓生は、47都道府県に在住し、それぞれの地域や各界で活躍し、全国的に繋がりを持っています。その強みを最大限生かし、「学生が主人公の魅力あふれる大学」という本学法人化の目指す理念の具現化に向けて、私は全国の同窓会支部の力を結集して全力で取り組んで参りますので、皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げ、挨拶とさせて頂きます。

都留文科大学同窓会役員

役職名	氏名	卒科
名誉会長	福田誠治	学長
会長	亀田孝夫	S51英
副会長	桐井幸雄	S32初
	木浦憲一	S46初
	原　喜雄	S53初
	日向哲男	S51初
庶務会計	小幡哲明	S56国
	河端雄一	S63初
	藤本信夫	大学課長補佐
事務局長	鈴木　守	S55初
事務局次長	浜欠亮吉	S39国
	外川正純	S46英
	原田裕太	H７初
監事	淡野香百合	S39初
	相川洋子	S52英
理事（支部長） 北海道支部長	加藤佳栄	S56英
岩手支部長	堀籠智志	S53国
山形支部長	鈴木雄二	S55国
宮城支部長	菅野俊雄	S55国
福島支部長	大竹豊紀	S39初

役職名	氏名	卒科
茨城支部長	宮内健治	S52国
群馬支部長	齋木雄造	S52国
埼玉支部長	西　敬	S56初
千葉支部長	川名和則	S51英
東京支部長	松本多加志	S44初
神奈川支部長	板倉忠臣	S30初
山梨支部長	田中克己	S52初
静岡支部長	清水　猶	S42国
長野支部長	堀内敏明	S54初
岐阜支部長	山本吉朗	S40英
新潟支部長	池原栄一	S50初
富山支部長	高木要志男	S52初
石川支部長	西田良治	S49国
福井支部長	西出健一	S50初
愛知支部長	平手孝幸	S54初
三重支部長	松本正美	S48英
奈良支部長	岡田善英	S45初
大阪支部長	泉川芳夫	S49初
兵庫支部長	渋谷訓生	S41英
京都支部長	枡谷雄三	S45初

役職名	氏名	卒科
滋賀支部長	松嶋孝雄	S47初
広島支部長	小谷桂司	S44初
鳥取支部長	金田吉治郎	S45初
島根支部長	小藤　貢	S44初
岡山支部長	原田直樹	S45国
愛媛支部長	谷川忠孝	S42初
徳島支部長	小倉健司	S54英
高知支部長	前田志郎	S48初
長崎支部長	西田正人	S40初
熊本支部長	永田好文	S47初
宮崎支部長	荒巻孝行	S35初
鹿児島支部長	本田武久	S43国
理事 沖縄支部長	金城宏安	S33初
北海道	山本洋嗣	S56国
東北ブロック理事	鎌田　清	S47初
兵庫県	赤穂榮一	S40英
山梨県	水上昭夫	S39初
	松土仁郎	S44初
	原田孝雄	S63初
	丸山一彦	S52初

役職名	氏名	卒科
理事	依田一秀	S50初
	一之宮英文	S51初
	一瀬英治	S46国
	若林四郎	S31商
	小田切道之	S43初
	作地　眞	S46国
	奥脇隆樹	S45初
	赤松金次郎	S35商
	高橋義美	S53初
顧問	奥秋順作	S31初
	志村武男	S31商
	後藤　敬	S33商
	佐藤唯一	S32初
	佐藤英雄	S38国
	奥石　東	S32初
	山縣永良	S39国
	勝俣武男	S41初
	永田清一	S46国
	小林孝次	S46英
	千野文雄	S48英

学修から学習へ（2）

都留文科大学学長

福田　誠治

同窓会も、京都と滋賀に新支部が設立され、空白県が少なくなった。新学長は、できるだけ足を運び、同窓会の皆さんと大学の将来について語り合った。そこで交わされた中心的な話題は、「都留で培った人間力が今日の支えになっている」「貧しいながらもかけがえのない人間関係を作ることができた」ということだった。おそらく、教育の本質は、学力を上げることではなく、一人ひとりの子どもの内に「人間として生きていく柱」を作ることである。学力の方に目が向いてしまうと、この「人間として生きていく柱」がずっと細くなるか、その形成に失敗してしまうことになるだろう。

かつて、知育偏重、塾通いの弊害、受験偏重といって批判的な目を向けていた教育界もマスコミも、今は口をつぐんでいる。特に大きく変わったのは、小学校教育である。これまで、私学を受ける一部の子どもを除いて、学力競争は小学校の主たる目的にはなっていなかった。それが、全国学力調査の再編成と結果公開圧力によって、現場ではとりあえず得点を上げるために詰め込み教育を強化するように動いてしまう。予想問題集を作り、練習を繰り返し、テストに慣れさせるための時間を増やすことになる。ところが、これでは、先進国の労働者の育成には失敗する。

そのことは、国際学力調査PISAの結果に基づいて、OECDから指摘されてきたことである。ヨーロッパは、「知識経済」と「生涯学習」という社会制度を構築して、先進国としての物造りに乗り出している。いわゆるイノベーションである。そこでは、新しい知識を生み出すような「考える力」と「学び続ける力」が強調される。人間が皆同じ能力を持つ必要はなく、それぞれが個性を発揮しながら、それを「コミュニケーション力」でつないでいく。このような学力像がしっかりできあがっている。先進国が物造りをしながら豊かな生活を維持して生き残っていくには、創造的な物造りしか道はないのである。正解を覚えるような学修では歯が立たない。

ドイツは、物造り経済を強化するために政府総債務、いわゆる国債発行高を2010年から抑制し、2012年から減少させている。日本では、国債関連費用は新年度予算の支出で23兆4500億円、収入で36兆8600億円となっていて、利払いや償還以上に発行高を増やし、さらなる借金財政へと進んでいる。物造り経済の強化に舵を切ったドイツと、アメリカにならって金転がしを止められなくなった日本。この違いが、学習と学修を分ける深い根っこの違いだ。テストの得点よりは本物の学力を国民が望む国でありたい。

平成26年度　都留文科大学同窓会都道府県別会員数

No	県名	会員数	No	県名	会員数	No	県名	会員数	No	県名	会員数
1	北海道	590	13	東京都	1,315	25	滋賀県	103	37	香川県	142
2	青森県	232	14	神奈川県	1,256	26	京都府	240	38	愛媛県	274
3	岩手県	514	15	新潟県	636	27	大阪府	478	39	高知県	79
4	宮城県	571	16	富山県	587	28	兵庫県	827	40	福岡県	233
5	秋田県	231	17	石川県	577	29	奈良県	96	41	佐賀県	82
6	山形県	318	18	福井県	509	30	和歌山県	185	42	長崎県	197
7	福島県	735	19	山梨県	3,570	31	鳥取県	160	43	熊本県	186
8	茨城県	425	20	長野県	1054	32	島根県	227	44	大分県	110
9	栃木県	472	21	岐阜県	511	33	岡山県	376	45	宮崎県	151
10	群馬県	324	22	静岡県	1,379	34	広島県	484	46	鹿児島県	338
11	埼玉県	546	23	愛知県	1,190	35	山口県	171	47	沖縄県	202
12	千葉県	590	24	三重県	373	36	徳島県	382	48	外国･不明等	7,142
										合　計	31,370

□ 支部設立済都道府県

平成26年４月１日現在

都留文科大での35年間

都留文科大学退職教員
初等教育学科
高田　理孝

本学には1979年着任しました。今日までの35年間を振り返ると、研究面では、自分のその時々の関心でテーマは変わってきました。20代前半の認知心理学との出会いから、花形であった記憶の中でもコントロール・プロセスである体制化に興味を持ち、30代まで様々な可能性について検討を繰り返しました。40代になるとさらに、体制化を含むスキーマに注目するようになり、特に英語教育との関係に関心を持ちました。50代以降は、個人の過去経験の集積・再構成である自伝的記憶が研究テーマになっています。

教育面では、多くの大学教員がそうであるように、専門領域の研究はともかく、概論的なことは自分で勉強し直さねばなりませんでした。今でも思い出すのは、着任早々405教室が満員になるような教育青年心理学を任され、懸命に作成したノートを持ち階段を上るときの緊張感と胸の鼓動です。幸い、ゼミ等で素晴らしい学生達に恵まれ、人間力養成をモットーにした夏のテニス合宿・冬のスキー合宿等を続け、特にスキー合宿では非日常的な体験を通して学生諸君が目に見えて成長するので、時間を共有した自分にとっても極めて貴重な経験であったと思っています。

若いときは学務にほとんど関わらなかったのですが、40代も末になって、入試関係の委員会の長を歴任、データ分析をもとに入試改革を行い、大学教員による高校訪問も開始しました。また、本学が法人化された後、副学長職に就き、教授会議長を任されました。初回の教授会では、405教室での初めての授業のように緊張していたことは忘れられません。また、今谷元学長辞任を受け、加藤前学長就任までの短い間でしたが、学長代行をつとめたこともありました。加藤先生からは多くのことを学び、それは人生の宝ともいうべきものになっています。あらゆる意味で、都留文科大学は私にとり大いなる人生の学びの場でありました。学びを可能にした諸先輩・同輩・それにこれからの都留文科大学を担うであろう方々に感謝したいと思います。

30年の出会いから

都留文科大学退職教員
初等教育学科
椙守　光惠

初等教育学科・音楽教室の一員として着任したのが35才の時でした。上田薫学長から現在の福田学長まで、７代の学長のもとで、教育と大学運営に参加し学ばせていただきました。困難な問題を沢山かかえ、教授会も夜おそくまで議論を闘わせ、大会議室に座っているだけで酸欠になる状態でしたが、そのすべては、大学のため、学生のためであったことが懐しく思い出されます。生きてきた道も考え方も異なる教授陣の中で、御意見を伺いながらさまざまな場面で大きな刺激を受けました。又、さまざまな委員会を通して温かな人間関係も作らせていただきました。又、全国から集まってくる学生さんたちと、音楽を通してとても密度の濃い付き合いができました。苦学しながら必死に学ぶ姿に、何度も胸を打たれ、彼等の負けじ魂に人間の底力を見せていただきました。一人ぼっちで入学し、自分の居場所を見つけ、仲間と支え励ましあっていく姿に、大勢の中でもまれていく中にしか、真の成長はないことを教えられました。

音楽棟の私の研究室には、都留に着任した一年目に、後藤道夫先生と一緒に担任をした時の写真がかざってあります。当時は、特別編入制度という、一年間で必要な単位が取得できる制度があり、皆大学を出た上で小学校教員として生きていきたいという強い志を持った人たちが集っていました。彼らは、30年たった今、きっと50代半ばになっていることでしょう。教育現場で大ベテランとして陣頭指揮をとっていることと思います。時折、彼らの卒業式の写真を見ながら、自分の未熟さに申し訳ない思いにかられます。個性豊かな多勢の学生さんたちと一緒に笑ったり泣いたり、時には怒ったりしながら楽しい30年を過ごさせていただきました。音楽専攻の皆さん、今も音楽は皆さんの近くにありますか。

自然豊かで暖かい人たちの中で、かけがえのない時を過ごさせていただき心から御礼申し上げます。

都留での出会いに感謝

都留文科大学退職教員
国文学科
牛山　　恵

1994年４月、私は横浜の公立中学校から都留文科大学へ赴任しました。小学校、中学校の教師として子ども達とともに、さまざまな実践をしていた私が、大学の教師になりたいと思ったのには、二つの理由があります。一つは、教師を育てるということです。児童・生徒を育てることは、魅力的でやりがいのある仕事でしたが、限界も感じていました。もっと、もっと効率的に教育の仕事ができないだろうか。それには、教師を育てることだ。そう考えたのです。

もう一つは、ライフワークと考えていた、宮沢賢治の童話の受容を本腰を入れて研究したいということでした。研究のための環境がそろっている大学は、理想的なところのように思えたのです。

この21年間、私が少しも揺るがなかったのは教員養成という目標です。一人でも多くの優秀な教師を育てたいと思い、そのための努力をしてきました。幸いなことに、すばらしい学生達との出会いが、私の後押しをしてくれて、今では小学校・中学校・高等学校で、教え子達が教鞭をとっています。そのことは、私の生涯の誇りです。

大学人として私が迷ったのは、都留文科大学で、さまざまな先生方と出会い、その方々から学んだことで、世界が広がったことが原因でした。研究したいこと、しなければならないことが、次々に見えてきたのです。その一つがジェンダーでした。

ジェンダー・プログラムの創設に参加し、自分の専門である国語教育とジェンダーの関わりを追究することは、私の課題だと考えました。この研究は、２月に著書としてまとめることができました。

もう一つは、国語教育史の問題です。私の関心は昭和20年代の単元学習にあります。これについては、研究を始めたばかりで、退職後の課題としてとってあります。

ライフワークの宮沢賢治童話の受容は、12月に著書を出すことができました。

こうして振り返ると、都留での出会いが私を成長させてくれたことがはっきりわかります。都留文科大学に心から感謝するとともに、ますますの発展をお祈りします。

出会い・別れ・ことば

都留文科大学退職教員
比較文化学科
鳥居　明雄

昭和五十五年の着任以来三十数年、学内外でのじつにさまざまな出会いと別れの積み重なりとして今に至っている。それにつけても想起されるのはつぎのようなことである。

股旅物の創始者であり、畢生の戯曲『瞼の母』の作者でもある長谷川伸が、幼少期三歳のときに別離した生母三谷かうとの四十七年ぶりの再会を果たしたのは、昭和八年のことであった。その当時、小学校も卒業できずに自学自勉の刻苦を通した長谷川伸は国民的大衆作家として名実備わり、一方の生母は再婚先である三谷家で社会的にも輝かしい家系を築き上げていた。社会的な事件にもなったこの再会劇は、仲介者の松本恵子氏からもたらされたつぎのような書状がその発端であった。

「瞼の母」を語っていらっしゃる貴郎に御母様が幾十年間、長谷川家に残してこられた貴郎方御兄弟の事を、夢に見、幻に見つづけていらしたお心を、是非御伝えしなければならないと存じ、突然ながらペンを執りました。御母上様は今年七十二歳の御高齢で、三谷家の長男隆正氏の許に、御幸福にお過しになっておられますが、「瞼の子」故に、年老いたお心を、どんなに悲しいものにされていらっしゃる事でしょう。「私があの家を出る時に、頑是ない伸は、僕が今に大きくなって、軍人になって、お馬に乗ってお迎いに行ってあげるからね、お母さん、泣くんじゃないのよといったあの声が、未だに耳に残っています。あの小さな子供は今何処にいるんでしょう、ほんとうに、たった一目でいいから会いたいと思いますよ」。これは貴郎の御母様が洩らされた御述懐でした。或る日、御母上様の為に、お馬に乗った軍人さんになってあげて下さいますように、お願い申上げます。

この書状を手にした長谷川伸はつぎのような述懐を残している。

円タクを呼んで貰って駅へ急がせた私の懐ろに、女文字の手紙はあった。環状線道路をスウスウと駛る車の行くこの道、連なる家並が、私の眼に、何度かぼッと霞んだ。涙がとめ度もなく湧いて出てくるのだった。汽車に乗って後も、熱海に下り立って車に乗ってからも、いつもの如き一人居の客室にあっても、相客を避けて入る湯の中でも、涙は視力を幾度か潤ませた。夜に入りて雨となった。（母に会えそうだぜ）だれかにそう云ってみたい、宿の女中さんでもいいから、そう話してみたい、そんな衝動が口の端にうずうずしてきた。が、怺えた、心安くしている女将にすら、気振りもみせず、寝苦しい二夜を過し、紀元節の宵に我が家へ帰った。

これら三者の述懐の内容もさることながら、三者三様の、その日本語、その述懐ぶりの品性に強く胸撃たれる。「お馬に乗って」と今もつぶやく生母のことばの息遣い、書簡文の気高さ、長谷川伸の語り口。いずれも文字を前提にしてはいない語り口調、述懐のことばのもつ品性と真摯が、格別に胸を撃たずにはおかない。

出会いと別れ、別れと出会い。通有の文字にはけっして成らないその機微と情動は、述懐のことばとしてそのつど生まれ消え去る。まさに、出来事やいのちの営みとともに、そこに寄り添うことばも、生消をともにする。これをもって、世の人の営みの実相がいかなるものか、一目瞭然というべきだろう。

これまでの永年諸般にわたるおつきあいに、この場をかりて謹んでお礼を申し上げます。

教職支援センター初年度の活動と今後の構想

教職支援センター長
田中　昌弥

本学が教職支援センターを開設して１年が経ちました。直近の課題への対応と、体制づくり、将来構想を並行して行う忙しい初年度でしたが、同窓会長の亀田孝夫特任講師、上原明子専任講師、金山光一特任教授の尽力で順調な滑り出しができたと思っています。

多方面にわたる業務の中でも、今後の見通しとの関係で特に力を入れたのは、都留の地域と連携した教職教育の前進です。本学では、都留市教育委員会のご協力を得て、学生が市内の小中学校の授業や放課後指導のお手伝いをしながら現場で学ぶSAT活動を重視してきました。これにセンターが加わって学生への個別支援を充実させ、さらに市内の先生や保護者の方々をお招きして、学校の仕事の背景や保護者の思いを伝えていただく授業を開いて学生から好評を得ました。この授業は、仕事を終えてお疲れの時間帯にもかかわらず大学に駆けつけてくださった、地域の先生や保護者の方々のご協力があってこそ実現したものです。

21世紀の教員養成に求められているのは、自ら理論と実践とを往還させて学び続け、創造的な教育実践を展開できるための基礎を育てることです。この点で、都留の地域に支えられた本学の条件は、大きなアドバンテージとなります。現在、本学の教員養成のあり方全体の改革を準備していますが、そこでの本センターの役割は、地域との連携によって４年間を通した実習体系を実現し、学生がそこでの経験と学部で学ぶ理論とを結びつける支援を行うことだと考えています。

また、センターが開設された目的の一つは、卒業生支援です。これについては、大学側が一方的に理論を提供するような関係ではなく、現場経験豊富な特任教員と同窓生の方々とが交流するなかでヒントを与えあう構成を考えています。それによって卒業後のニーズに柔軟に対応すると共に、皆様のお知恵やご意見を学生指導に還流できるのではないかと思っています。

皆様のお知恵をお借りし、他大学とも一線を画す、内実あるセンターにしていきたいと考えておりますので、引き続き、ご支援、ご協力をお願いいたします。

キャリア支援の現状と課題

キャリア支援センター運営委員会
副委員長
寺門　日出男

平成22年のリーマン・ショックによって、本学学生の就職状況も極めて困難な状況に陥った。その対策を講じるため、プロジェクトチームを立ち上げて検討し、翌23年、これまでのキャリアサポート室をセンターに格上げすることとした。

勿論、単に名称を変えただけではない。室の設置場所である４号館（旧図書館）が、学生達の動線からやや外れていることもあって利用状況が芳しくなかった。学生に立ち寄ってもらわなければ、何も始まらない。そこで、これまで事務室・資料室・相談室を隔てていた壁を取り去ってワンフロアーとし、窓も透明のガラスに取り替え、給茶機を設置する等、様々な改修を行い、魅力的な場所作りを行った。

人員の面でも段階的に充実を図っている。ほとんどの学生が教員になっていた時代はとうの昔に去り、今や一般企業に就職する者が約六割（ちなみに教員は三割、公務員が一割）を占める。そこで、キャリア相談専門職員を新たに採用し、教員・企業・公務員の各分野の就職相談に対応できるよう、専門アドバイザーを配置し、教員については従来通り同窓会の協力も仰ぎ、小規模ながらも手厚い支援体制が整いつつある。

こうした改革が功を奏し、数字的にみても本学の就職状況は改善した。昨年３月卒業生の就職率は、93.3パーセント。決して誇れるほどではないが、就職に力を入れている私学に比べても、それほど見劣りしない数字になっている。

ただ、この数字は所謂臨時採用での就職等をも含んだものである。正規採用された者の中にも、希望する業種・会社に就けなかったケースも多々ある。数字を上げることも大事だが、それだけに満足することなく、個々の質を高めていかなければならない。

さらに、これは本学に限ったことではないが、折角念願の職場で働けるようになったのに、二・三年で辞めてしまうことが、大きな問題となっている。良き社会人として送り出すため、キャリア教育の重要度が高まってきている。

活躍する同窓生

都留文科大学を卒業して

岐阜大学教授
橋本　治
（S52年度初等教育学科卒業）

都留文科大学では心理専攻で、小熊均先生・宗内敦先生にお世話になりました。

卒業後愛知県の教員となり、小学校に18年、中学校に12年勤めました。教育現場の30年間の後、岐阜大学にご縁があって、現在に至っています。岐阜大学大学院に７年勤めていますが、専門分野は教育臨床で、具体的には「いじめ」「不登校」「暴力」「自殺」「発達障害」です。

１．「情緒障害」へのかかわりがスタート

都留文科大学での卒業論文のテーマは「不安と社会性」で、臨床心理学の内容を扱い、非常勤講師でみえていた江川玟成先生にもお世話になりました。当時登校拒否と呼ばれていた人は、不安が強く、情緒的に不安定で「神経症的登校拒否」とも言いました。分類は「情緒障害」に属していましたが、情緒障害ではもう一つ「自閉症」が有名でした。

教育現場に来て、登校拒否の子は通常学級にも何人か在籍していました。自閉症の子は情緒の特殊学級（現在の自閉・情緒の特別支援学級）にいました。昭和53年というのは養護学級義務化（昭和54年）の前でしたので、特殊学級というのは少なかったのですが、赴任した小学校には２つの特殊学級があり、12，３人の児童がいました。

２．「自殺予防」「いじめ」「発達障害」へ

新任は小学校２年４組37名の通常学級でした。児童数1000人を超える学校でしたので登校拒否の子もいて、心理学出身ということですぐに教育相談を依頼されました。神経症的登校拒否は「自殺」もありうるということで「自殺予防」の道に進み、1980年前後に「いじめによる自殺」の事件等があって「いじめ」にかかわるようになりました。

「自閉症の子」とは昭和53年にすでに関わりがあって、学校長に特殊学級の担任を希望しましたが、「通常学級のできない者に特殊学級の担任はできない」と言われ、５年間待ってようやく特殊学級の担任にしてもらいました。平成に入って通級指導のことが話題に出てくるようになり、通常学級の中の支援が必要な子が増加し、今は「発達障害の専門家」としての仕事もしています。

教育現場で30年間、通常学級・特別支援学級・通級指導教室のすべてを経験したことは、今とても役立っています。

３．大津市の「いじめ問題」に関わって

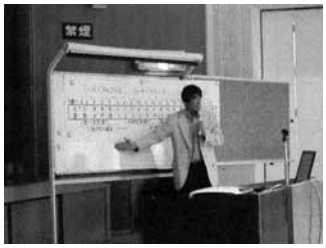
平成23年10月11日、大津市で中学２年生の男子がいじめに関連して自殺しました。日本中でそのことが大きく報道されたのは平成24年の７月に入ってからでした。わたくしは大津市教育研究所の依頼で、平成24年１月６日に大津市全教員対象のいじめ防止の講演をしました。さらに大津市の教育長さんが襲われた直後の８月28日にも、今度は大津市立の小中学校に加え、保育園・幼稚園の教職員も参加してのいじめ防止の講演をしました。その後平成25年度に２回、平成26年度も２回のいじめ防止の講演をするなど、まさにこの問題に直面している者の一人です。

４．岐阜県可児（かに）市の「いじめ防止基本方針」を答申して

可児市いじめ防止基本方針案を渡す橋本治委員長＝同市役所

平成25年10月11日の「国のいじめ防止基本方針」を受け、平成26年度日本中の学校が「いじめ防止基本方針」を作成することになりました。地方公共団体は努力義務となっていますが、平成24年10月に「子どものいじめの防止に関する条例」を定めた岐阜県可児市では「市のいじめ防止基本方針」を早急に定めることになりました。第３者委員会である「いじめ防止専門委員会」の委員長である橋本から市長に答申したのが平成26年２月27日でした。特色は「家庭の取組」「幼稚園・保育園の取組」が盛り込まれていることです。

５．岐阜県「発達障害児童生徒支援事業」県専門支援員として



発達障害の専門家としてここ７年は毎年500～1000学級を巡回相談しています。幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校と幅広く巡回していますのは、支援が必要な子を長いスパンでみていく必要があるからです。講演は年間100を超えており、要望の強さを感じます。

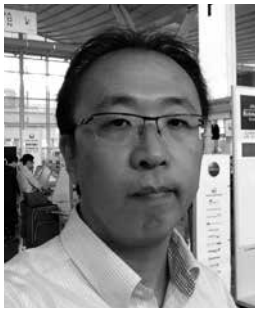
６．おわりに

都留市の４年間（心理学・ハンドボール等）を思い出すと今も熱いものがこみあげてきます。教育（人間）の基礎を育てていただいた大切な時期でした。でも今は教育臨床上の諸問題に第一線で関わることができる立場にいます。もう若くはないので一日一日を大切に教育現場の問題にかかわっていくつもりです。微力ですが何かご相談等ありましたら、下記メールにお寄せ下さい。

hasimoto@gifu-u.ac.jp

活躍する同窓生

「モノづくり総合紙」で専門用語と格闘中



日刊工業新聞社
本社業務局企画部　特集取材担当
諸治　隆仁
（Ｈ２年度英文学科卒業）

寄稿のお話を同窓会事務局からいただいたとき、学生時代から今に至るまで、決して優秀とはいえない私が「活躍する同窓生」などというタイトルで会報に掲載されてよいものかと思いました。しかし、こんな自分でもなんとか新聞業界で生き残っているという姿を、見捨てずに最後まで指導くださった先生方や付き合ってくれた先輩方、同級生、後輩たちに見ていただくよい機会だと思い、引き受けさせていただきました。事務局の方々に感謝致します。

私が勤務しているのは今年11月に創刊100周年を迎える日刊工業新聞社です。卒業後、１年間、別の会社での勤務を経て入社し、勤続23年ほどになります。弊社は社名と同じ「日刊工業新聞」を月曜から金曜まで日刊で42万部発行しているほか、専門誌や書籍、タウン情報紙の発行、展示会やセミナーの主催などを事業として行っています。

古くは日本史の教科書にも登場する第64、65代内閣総理大臣の田中角栄氏による著書「日本列島改造論」は弊社が1972年に出版したものです。また、社名に「工業」とありますが、産業関連だけではありません。副都心線を除く東京都内の東京メトロ全駅で配布されているフリーペーパー「メトロガイド」も弊社が発行しているものです。

さて、私が所属している部署が携わっているのは弊社の新聞事業部門で、企画部という部署において特集紙面の企画・制作を行っています。新聞記者とは若干、異なる仕事です。広告部の営業担当者が特集にマッチするスポンサー企業の広告を集めてきます。私は企画した特集のテーマに関連する企業や団体・研究機関などを取材して、その市場や技術動向の紹介・解説記事を執筆しています。

「理系」とは全く縁がなかった自分が社会に出て、「理系」が読者の大半を占める新聞で産業界の市場動向や技術解説記事を書くことになるとは夢にも思いませんでした。入社以来、今日までに機械、エレクトロニクス、化学、自動車など幅広く産業界を担当してきました。その中でも深い関わりを持って担当しているのが、エレクトロニクス、半導体業界です。産業の最先端分野で利用される市場・技術を追いかけています。

半導体産業界で利用される技術はナノメートルオーダーという想像を絶するサイズのものです。量産半導体デバイスの回路線幅は今や10ナノメートル（ナノは10億分の１）台に突入しています。身近なものの太さを例に挙げると少しはわかりやすくなるかもしれません。人間の髪の毛の太さは約50－80マイクロメートル。１マイクロメートルは1000ナノメートルです。このサイズで集積回路を作っていくのです。

こういった最先端のモノづくりで利用される技術を紹介する記事を書くためには日頃から各社の発表を見ておくほか、最前線で製造技術に携わるエンジニアの方々から話をうかがっておかなければなりません。話をうかがうには専門技術や専門用語を知っておく必要もあります。

学生時代、不勉強でサボってばかりだった私もシリコンや窒化ガリウム、炭化ケイ素といった材料から、モノシラン、三フッ化水素などの製造ガス、ゲート絶縁膜や電荷キャリアなど、文系、しかも英文学科の講義では全く登場しなかった単語や用語と日々、戦っています。

また、最先端のプロセスを目指す企業は設備投資額が１社で年間１兆円を軽く超えます。例えば世界最大の半導体受託生産メーカーである台湾のＴＳＭＣは2014年の設備投資額が96億米ドル、2015年は投資額をさらに増やし、100億米ドル（日本円で１兆円以上）を超えると予測されています。こういうとてつもない金額の設備投資が行われる産業界を追い続けています。学生時代の素行不良だった私を知る方々はきっと信じられないことでしょう。

取材対象や市場は国内企業・市場だけでないため、目を通す資料は日本語だけでなく、英語や中国語の場合もあります。取材のために１人で海外に飛ぶこともあります。取材で会っていただく方はエンジニアだけでなく、上場企業の経営者もいらっしゃれば、大学などの研究者の先生方もいらっしゃいます。そういった方々から話をうかがい、記事を執筆し、紙面を作っています。

最後に、「活躍する同窓生」というタイトルに私が見合っているのか―。我らが母校は教員養成系の大学で、民間企業に進む卒業生は少なく、マスコミとなるとさらに少なくなります。卒業生全体から見ればわずかな人数ですが、そのマスコミ業界で活躍している優秀な卒業生たちがいます。残念ながら私は活躍していない同窓生ですが、何とか新聞業界、産業界で生き残っています。

集い、語り、盃を交え、母校に思いをはせるひと時

北海道支部長　加藤佳栄

8月2日札幌市内のホテルを会場に、道内から20名の同窓生が集い、総会、講演会、懇親会が行われました。

今回の講演会は「私の過ごした日々あれこれ　そして北海道支部誕生」と題して、初代北海道支部長の日下　功氏（昭和33年　初等教育卒）にお話をいただきました。氏は、文大卒業後、赤平市立もじり小学校で教員生活のスタートをきり、その後5校にご勤務、中でも数校においては閉校事務という重責に携われ、その後三笠市立新幌内小学校長としてご退職、三笠市の法務省人権擁護委員としてご勤務され、現在は地域のラジオ体操会の会長、少年消防クラブ協議会の会長としてご活躍の日々を送られています。講演の中では、勤労学生としての日々、教員生活の中で守り続けたこと、支部設立時のお話、そしてそのような日々を今現在振り返っての感慨を、ご準備いただいた昔の懐かしい資料を交えてお話しいただけました。特に同窓会の北海道支部の設立にあたっては広い道内を一つにまとめるべく奔走され、現在の本支部がありますのは、まさしく氏のご尽力によるものと一同思いを新たにしたところです。

その後の懇親では、盃を介しながら各々の在学時の思い出や現在の文大の話に大いに花が咲き、会が深まったことは言うまでもありません。

結びに校歌「花のかげ」を歌い、「桂友会」の合言葉のもとに次年の再会を期し、本年度の会を閉じました。

なお次年度の会は、長年の懸案だった札幌市以外での開催が開催支部のご尽力により実現、帯広市で8月9日（日）に持たれる予定です。

平成26年度役員

支部長	加藤　佳栄	（昭和56年　英文）
副支部長	横山　　勲	（昭和41年　国文）
	中村厚喜夫	（昭和53年　初等教育）
	長坂　　隼	（昭和37年　初等教育）
	板東　真一	（昭和56年　英文）
事務局長	山本　洋嗣	（昭和56年　国文）
事務局次長	照山　秀一	（平成2年　英文）
	神野　昌代	（平成5年　国文）
会計	大花　　学	（昭和61年　国文）
会計監査	西多　　弘	（昭和41年　国文）
	西山　　肇	（昭和41年　初等教育）
事務局員	北田　則章	（昭和57年　英文）
	桜田　　琢	（平成9年　社会）
	金子　　歩	（平成16年　国文）
顧問	日下　　功	（昭和33年　初等教育）
	熊谷　　勲	（昭和39年　国文）
	当銀　誠博	（昭和40年　国文）
本部理事	加藤　佳栄	（昭和56年　英文）
	山本　洋嗣	（昭和56年　国文）

第11回「べにばな会」総会を開催

山形県支部長　鈴木雄二

山形県内の卒業生が集う第11回「べにばな会」総会を11月29日（土）に山形市の旬味割烹「飯豊」で開催し、14名が参集しました。

今回は、東北地区の連携を深めるため、菅野俊雄宮城県支部長に出席をお願いしました。

菅野支部長からは都留文科大学合唱団が平成26年度全日本合唱コンクール全国大会大学部門において、金賞、文部科学大臣賞を受賞し日本一になったことや宮城県支部の活動状況（震災で被災された方への熱心な支援活動の話には深い感銘を受けました）、今後東北各県支部の連携を深め、絆を一層強めていきたいとの話をいただきました。

総会で活動報告・事業計画や決算・予算が承認されたあと、懇親会に移りました。

近況紹介で昭和33～34年に卒業された奥山好子さん、半田慧子さんから大学設立当時の学生生活の話や今も当時の同級生と交流が続いているとお聞きして本学の素晴らしさを再認識しました。

いつ学んだ人であってもすぐに話が分かりあえるアットホームさが都留大の良さだと思います。

これからも母校の発展のために尽力していくとの決意をみんなで誓い合い、夜遅くまで話題は尽きませんでした。

最後に27・28年度の支部役員を紹介します。

○顧問　武田　茂行　（昭和54年度・初等教育）
○会長　鈴木　雄二　（昭和55年度・国文）
○副会長　佐藤　英樹　（昭和60年度・初等教育）
　同　奥山　広幸　（昭和57年度・初等教育）
○会計（監事）白林和夫（昭和60年度・初等教育）
○理事（幹事）
・村山地区　小川　秀人（昭和55年度・国文）
　同　鈴木　雄二（昭和55年度・国文）
　同　和泉　一彦（昭和58年度・国文）
　同　白林　和夫（昭和60年度・初等教育）
　同　渡邊　　隆（平成5年度・初等教育）
・最上地区　武田　茂行（昭和54年度・初等教育）
　同　佐藤　成美（昭和54年度・国文）
　同　佐藤　敏幸（平成8年度・初等教育）
・置賜地区　神尾　正俊（昭和55年度・国文）
　同　佐藤　英樹（昭和60年度・初等教育）
　同　日下部洋子（平成13年度・初等教育）
・庄内地区　奥山　広幸（昭和57年度・初等教育）
　同　原田　清一（昭和60年度・初等教育）
　同　若月　　力（平成4年度・初等教育）
　同　中條　秀基（平成20年度・初等教育）

都留でつながる パート2

宮城県支部長　菅野俊雄

平成26年11月30日（日）、牡鹿半島にある牧浜地区の集会所で被災地支援第2弾「ザ・宴会」を宮城支部主催で開催しました。栗駒田高田地区の皆様の協力による豚汁とおにぎり。ボランティア団体、桜士（さくらもののふ）、文字郵便局の皆様によるバーベキュー。それに、地元・牧浜で取れた牡蠣が豊島元東浜地区災害対策本部長から振る舞われ、カラオケ大会も大盛況。地域住民約30名が「宴会」を楽しみました。4年前の合唱団のコンサートで繋がった絆が深まっていることを感じました。震災から4年。宮城支部でできる支援をこれからも実行していきたいと思います。

教員採用試験対策学習会を今年度も開催し、「中学校英語」、「高校英語」で2名が見事合格しました。

昨年2月の支部総会には名誉顧問の輿石東先生にご臨席いただき、53名の参加で盛り上がりました。

「支部総会」、「教員採用対策学習会」、「被災地支援活動」を軸にこれからも「都留でつながる」支部活動を充実させていきたいと考えています。同窓会会長、学長、理事長、そして全国の同窓生の皆さまからの宮城支部へのご支援に深く感謝申し上げます。

＜平成26年度役員＞

名誉顧問　鎌田光彦　鎌田　清　小野俊次　千葉龍正
顧問　栗生秀夫　及川勝友　半澤登美子　高橋　博　齋籐章夫　横山貞夫　目黒つねみ　松田美智子　相澤光信　森田宏彦
支部長　菅野俊雄
副支部長　安曇玲子　伊藤常治　齋藤　直　市川人士　布施勝久　菅原義之　高橋克己　菅原佳江
事務局　齋藤竜一　坂本忠厚　松浦和浩　繁田由美　一条良介　伊藤ひろみ　及川恵子　清水　進　佐藤圭二　蓮沼秀行　浅井理香
会計　横山英実　小野寺直美
地区役員　仙南　今野貞子　伊藤久美子
仙台　浅野俊夫　牛草　学　熊谷拓郎
中央　菊田　学　松浦和浩
古川　伊藤　稔　小笠原裕見子
栗原　千葉睦子　後藤咲織
石巻　片岡有吾　菊田夏子
気仙沼　小野寺直美　千葉　淳

茨城からの便り

茨城県支部　宮内健治

同窓生の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。茨城支部同窓会では、本年度８月末に水戸市三の丸ホテルで同窓会役員会を実施しました。支部長から同窓会理事会等大学の現況報告がありました。福田学長のもと、脚光を浴びる大学の陸上部や合唱部の活躍など同窓生として嬉しく思います。その後、親睦会をもち、大学での学生生活等の情報交換をしました。

私の勤務校（藤代高校）では、生徒、職員が都留大の大学見学会に参加し関係の方に大変お世話になりました。今後、都留大への入学につながればと期待します。昨夏勤務校の野球部が夏の全国大会（甲子園）に出場し、都留大の同窓生や大学の恩師から温かい激務を受けました。多くの皆様に感謝申し上げます。

また、４月理事会後の在学生懇話会に参加の学生が本県教員採用試験に数名合格し、今後の活躍が期待されます。

茨城支部では、次年度に支部同窓会総会の計画をしています。

気軽に声をおかけください

群馬県支部長　齋木雄造

群馬県支部では、平成26年８月23日（土）高崎駅ビル内、ホテルメトロポリタン高崎で第６回総会・懇親会を開催しました。初対面でもすぐに打ち解け合えるのは、都留という共通の基盤をお互いがもっているからこそだと思います。「忙しかったけれど出席してよかった」という声が印象的でした。

ところで、本支部では、新たに在学中の皆さんを支援する取組を企画し、本年２月14日（土）に役員が大学へ赴き、懇話会を行うことになりました。

本県卒業生318名（H25.4.1現在）の皆様、在学生の皆様、群馬県では、本支部が活動しています。ぜひ、折にふれ気軽に声をおかけください。

結びに、第７回総会・懇親会を次のとおり開催しますので、皆様のご出席をお待ちしています。

日時　平成27年８月22日（土）18：00

会場　ホテルメトロポリタン高崎（高崎駅ビル内）

〈群馬県支部役員〉

支部長　齋木　雄造（昭52国）

副支部長　熊川　稔（昭49英）　原　俊明（昭59英）

事務局長　島田実恵子（昭44初）

監事　金沢　和子（昭54英）　金子　朋裕（平２初）

庶務　安藤　貴子（平５初）　江原　悠一（平10英）

土屋　勇（昭57英）　古川　整（平11社院）

同窓会「埼玉県支部」の絆をさぐる・・・

埼玉県支部長　西　敬

前支部長、渡邉哲朗先生より後任のお話があったのが26年２月のころ。先生とは平成12年から２年間同一校の勤務歴があり、当時、教頭職として赴任されてきた際に、都留文科大学の先輩であることを知らされました。昭和58年に奉職してから、二人目の大先輩との出会いでした。大学卒業後は、夏の林間学校引率で富士五湖方面に向かう程度で、疎遠になりかけていた自分の意識が揺り動かされた思いでした。その後先生とは年賀のやり取りが続き、平成24年ころ、埼玉県支部の活動について事務局員として、名前ばかりの役職におりました。渡邉支部長には御勇退後も支部長職をお務めいただき、26年度より、わたくしが後任となっております。はずかしながら、そのこと自体、今回の会報への寄稿要請が契機となり、ネット検索の同窓会役員名簿で確認したという状況でありました。これまでの活動等についても十分把握しておらず、今後は「埼玉県支部活動」について前任の渡邉先生に御指導いただき、今後の運営を策定する段階にあります。

さて、インターネット検索で「都留文科大学　同窓会」の文言を入力すると、関連情報の多さに、今更ながら驚いております。32号会報によりますと埼玉県会員数は536名となっています。埼玉県の小中学校・教職員数はおよそ27000名、学校数は約1270校（政令都市を含む）という状況です。実態を比較して、会員数が多いのか少ないのか、気にはなるところですが、まずは「埼玉県支部」の現況を、会報の場で広くお知らせしたいという考えで、紙面の一部をお借りすることとしました。

実は、昨年度（25年）現任校（所沢中富小）に同時に着任した教員の一人（初任者）が都留文科大学の卒業生とのことでした。26年度には、その教員の後輩が本県教育界にデビューとのこと。山梨県と接する埼玉県。地理的には隣接県の位置ですが人知の交流はいかがなものかと、考えをめぐらせることがあります。今回の会報寄稿に際して、新進気鋭の後輩諸氏とともに諸先輩のご指導を仰ぎつつ、埼玉県支部活動再開の一歩を「人が繋がる」運営とし、自責を努めてまいります。

支部同窓会としての役割

千葉県支部長　**川名和則**

千葉県支部では、現役学生へのキャリア支援の一環として、千葉県公立学校教員採用試験二次対策講座を開講し、早十年を迎えようとしています。

林俊之元支部長がこの講座を開講し、野田純前支部長が発展させ、現在、私が受け継いでいます。

大学側主催の現役学生への指導には、毎年４月と５月に大学を訪問し元気な現役学生と面談させていただいております。昨今の千葉県公立学校教員採用試験志願状況や採用状況を踏まえ、志願書の書き方等も細かくアドバイスさせていただいております。

ここ数年、文大卒業生が10名を超えて千葉県内に採用されるようになりました。

昨年４月には、社会学部から初めて山田啓介君が千葉県立京葉高等学校の地歴公民教諭として採用され、現在、社会科指導と軟式テニス部顧問として活躍されております。

昨年12月27日には、この４月から内定されている現役４年生学生３名を含め、先輩教員と若手教員との懇談会を実施いたしました。趣旨は、「新卒採用された先生方が一人で悩むことが無いように、先輩の意見を仰ぐため」です。新卒採用者が経験教諭から学ぶことが今、強く求められており、一人で悩むことが無いよう元気づけております。

『子どもたちを元気にするためには、教職員が元気でなければならない！』を合言葉に今年も千葉県支部は応援しております。

東京都支部の近況

東京都支部長　**松本多加志**

同窓生の皆様方におかれましてはご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

合唱部の全日本合唱コンクールでの金賞受賞おめでとうございます。また、来年度も総会の折りにぜひ聞かせていただきたいものです。

さて、現在東京都の学校においては、校内ＯＪＴを中心に、都区市主催による各種研究・研修会が行われています。それに加えて、東京学芸大学以外の大学出身者によって、主に学校経営や運営の在り方についての研修組織として『一水会』があり、退職した方々には『伯水会』があります。現在、伯水会の会長として奈尾力先輩（昭和41年卒）が各種研修会の推進や『一水会』の支援に当たっています。

1980年代、50名以上の本学同窓生が、学校の管理職や都区市教育委員会の指導室（課）長、指導主事等を務めており、管理職志向の同窓生も私も含め多数いました。そこで、同窓生を対象に管理職を目指す研修会として『桂川会』が立ち上げられました。今の私があるのも温かくそして厳しい『桂川会』の先輩方のご指導ご支援のお蔭と深く感謝しております。しかし、2000年代になって管理職採用数が減り始め、志望する同窓生も少なくなり、個別の指導は行っていますが、会は現在休眠中です。

一方、2000年代になって新規採用数が増え始め、東京都の教師を目指す本学学生を対象に第２次試験に向けた『面接練習会』を支部として立ち上げました。本年度も８月16日に実施しました。これは、今後の東京支部の発展につながるものと信じています。

今度とも、“教師は絶えず研究と修養に励む”ことを念頭に、教職に限らず本支部の会員の方々の資質向上に向けた活動に取り組みたいものです。

＜平成26年度　東京都支部役員＞

支部長	松本多加志（昭44）	
副支部長	黒田　賀代（昭32）	長沢　和子（昭43）
	橋本　秀夫（昭44）	
庶務	奈良　　覚（昭45）	榛原　紀子（昭58）
	田村　　聡（昭62）	西村　学徳（平12）
会計	矢野　　優（昭47）	高野　明彦（昭49）
会計監査	松田　篤郎（昭42）	泉　　宜宏（昭47）

より多くの卒業生を山梨県の教壇へ!

山梨県支部長　**田中克己**

山梨県の公立学校教員選考検査は、今年度も厳しい状況が続いています。採用予定者数は、小学校で昨年度より10名多い80名。中学校では５名少ない45名となっています。志願者数を見ますと、小学校では363名で4.5倍。中学校では321名で7.1倍と、例年とほぼ同様の厳しい難関となっています。

そんな中、山梨県支部の主催による「山梨県教員選考検査二次試験対策会」を、同窓会本部の全面支援のもと、８月９日（土）にキャリア支援センターのある４号館にて実施することができました。本県出身の学生を中心に、26名という多くの学生の皆さんに参加頂きました。参加した学生達は皆、本県の教員第一次選考検査を通過し、第二次面接検査を受ける予定の優秀な学生の皆さんで、会場は熱気に溢れていました。

前半の全体会では、近年の選考検査の傾向や面接試験の基本を確認し、後半では26名が３つのグループに分かれ、実際の集団面接等について経験を深めました。面接の受け答えの中で驚いたことは、最近のほとんどの学生が学習支援ボランティア等で学校現場へ足を運び、教師としての職務の理解を深めていることでした。当然のことながら、意気込みも強く、その真剣な表情が印象的で、よく勉強していると感じました。

教師をめざし頑張っている私達の後輩が、一人でも多く、山梨県の未来を背負う子ども達の教育に力を発揮することを期待しております。

全体会

グループ別学習会

「頼もしい後輩たち」に期待

静岡県支部　大橋　均

平成26年５月10日（土）に大学で行われた「教員採用試験模擬面接会」に参加し、静岡県の教員を目指す学生の皆さんに模擬面接をさせてもらいました。予想していたよりも多くの学生が参加していました。教員志望の学生が多いということは、教育現場（学校）に身を置く者としては本当にうれしいことです。

教員はとてもすばらしい仕事ですが、現場には厳しい現実も待っています。当たり前のことかもしれませんが、初任者にも確かな授業力や生徒指導力が求められています。私などは、現場での指導経験のない大学卒（新卒）の初任者は、未熟と考えるのは妥当と思うのですが、保護者は（子どもも）許してはくれません。そういう時代です。

当日、面接をして、こういった教育現場の現実も理解しながら、それでも教員を目指す学生のきらきらとして、まっすぐな目に圧倒される思いがしました。

私からは、面接して感じたことや私が考える面接時の選考ポイント「この人と一緒に勤めたいと思えること」などについて話をしました。当たり前すぎると思われる話でも熱心に聞いてくれる都留文科大学の学生のまじめさは何物にも代えがたい素養だと思います。ここにたくましさが加わるとより良いと感じました。素直でたくましい「頼もしい後輩」が続々とこの大学から現れ、静岡県の教育を担っていってくれることを願ってやみません。

私自身は模擬面接会に参加することによって、学生から元気をもらい、教員を目指していたころのことを思い出しました。本当に得難い経験でした。

模擬面接会に参加してみないかと声を掛けてくださった先輩には何とお礼を言ってよいか分かりません。普段はお会いすることも少なく申し訳なく思いますが、節目、節目で声を掛けてくださったり助言してくださったりする同窓の先輩のありがたさが身に沁みます。

静岡県は山梨県の隣県で、卒業生も多い県です。大学やそこに通う学生のためにも、先輩や後輩とも力を合わせながら、支部を通して自分にできることを進めていきたいと思います。

第３回長野県支部総会～53歳の年齢差と夫婦参加

長野県支部長　堀内敏明

本支部は３年前に全国で36番目の支部として発足し、会員数は1056名です。本年度は福田誠治学長と亀田孝夫同窓会長をお招きし、11月８日（土）にホテルモンターニュ松本で総会及び懇親会を開催しました。総会には19名、懇親会には18名の参加がありました。本支部の参加者の特長は、設立以来、大先輩から卒業したばかりの会員まで年代層が幅広いことと夫婦や親子での参加があるということです。本年度も1959年から2012年までの卒業生、参加者の年齢差は実に53歳でした。また、ご夫婦での参加もあり、参加者はバラエティーに富んでいました。

総会では福田誠治学長より大学について、亀田同窓会長より事業についてお話しいただきました。また、議事で25年度事業報告及び会計・監査報告、26年度事業計画及び会計収支予算が承認されました。さらに２年に１度の役員改選でしたが、引き続き同じメンバーで継続することが承認されました。

総会の会場は、これまで北信、南信、中信で開催してきましたので、27年度の総会は10月に東信地区で開催予定です。参加をお待ちしております。

【長野県支部役員】

支部長　堀内　敏明（1980年卒）
副支部長　小林　久通（1982年卒）
同　塩澤　忍（1983年卒）
監事　小野沢伸二（1988年卒）
事務局長　市村　一彦（1989年卒）

岐阜県支部３回目の総会と役員改選

岐阜県支部長　山本吉朗

平成26年８月23日（土）に、第３回岐阜県支部総会を岐阜市の「ホテルグランベール岐山」にて行いました。総会は隔年毎に開催しているので岐阜県支部を設立して５年目に当たります。

本年度は、学長が交代されて、岐阜県出身の福田学長になられたということで総会への出席をお願いしたところ、大変ご多用の所を快くご参加を頂きました。総会の中で、今後の大学教育に関わるご見識の高い含蓄のあるお話を頂きました。総会は、事前に役員会で検討した内容に沿って滞りなく決定され、本年度以降の活動方針等が決定されました。

総会の後、懇親会を行いました。持ち寄った在学中の写真を見せ合いながら話題にして、懐かしい当時の思い出を語り合い大いに盛り上がりました。

昨年度から課題になっている会員を増やすことについてはなかなか効果が上がっていないのが現状です。会報を作成して送ったり年賀状などを送って勧誘したり、会員が知っている同窓生に話しをして貰っていますがなかなか効果が上がりません。今後も粘り強く会員の紹介や大学の情報の提供などの会報配布や呼びかけ等を地道に継続的に行っていく事にしたいと思います。同窓生の皆さん、会へ是非ともご参加を！

○平成26、27年度岐阜県支部役員

・顧問　細野矩義（'66卒）
・支部長　山本吉朗（'65卒）
・副支部長　清水　栄（'68卒）
　藤井幸子（'69卒）
・事務局長　佐藤眞治（'72卒）
・庶務　藤墳　功（'72卒）
　加藤勝祥（'78卒）
　古川一男（'81卒）
　梅田典利（'91卒）
・監事　河合　均（'84卒）
　山岡一信（'84卒）

福田学長へ花束贈呈

「母校での総会」

福井県支部長　西出健一

今年度、福井県支部「城山会」は設立20周年ということで、総会を母校で開催しました。多くの先輩諸氏のご努力のお陰で、会員も150余名という同窓生を抱える会に発展しました。

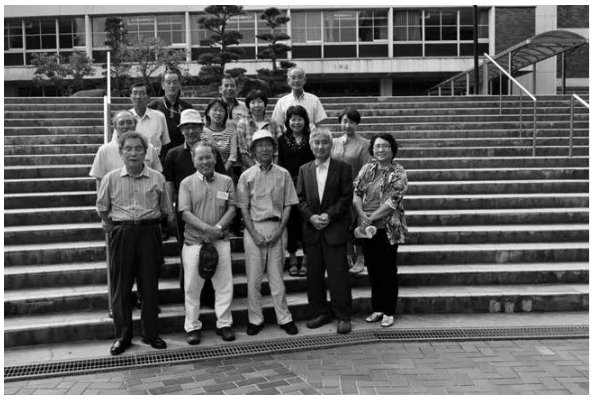
８月22日、23日の両日、15名の参加で無事に開催できました。福井から６時間の行程でしたが、途中、富士宮の「浅間大社」で参拝し、鳴沢の道の駅では雄大な霊峰富士を拝むことが出来ました。それまで雲に覆われていた富士が、私達のためにその姿を見せてくれたひと時は、参加者全員が感激のあまり声も出ず、しばらくずーっと見とれていました。

母校に着いたら、関係者の方々から心温まる歓迎を受け、総会のために特別室も準備して頂きました。福田誠治学長様や亀田孝夫同窓会長様からもご挨拶を頂き、さらに福田学長様からは今の教育課題、大学が進もうとしている方向、若い教員の育成、各県支部との連携などのお話をお聞きすることが出来ました。福井県支部からは、大学60周年に向け少しばかりの寄付をさせて頂きました。総会後は、近くの宿泊所で福田学長様も交えての大懇親会が開催され、いろいろな話で大変盛り上がったことはご想像のとおりです。

次の日は、リニア新幹線の見学。実際に、ちょっとだけでしたが走行しているリニア新幹線の車両を見ることが出来ました。そしてぶどう狩りを楽しんで、無事に福井に帰ってきました。

後日、福井県の地方紙（福井新聞）に連載されている同窓会関係の記事に城山会も掲載され、城山会の存在が広く県民の知るところとなりました。

現在は20周年記念誌の発行準備、真っ只中というところです。



交流を深め合う愛知県支部

愛知県支部長　平手孝幸

1　県支部の活動

愛知県では、県内を８地域に分けて、年１回地域幹事会を開いている。今年は、「交流会」と名称を変え、より多くの方にも参加しやすいようにした。ここでは、各地域の幹事から活動報告があり、互いに情報交換を行った。また、支部長からは、採用試験対策の報告と、来年開かれる５年に一度の県総会の基本案について提案があった。

（第10回県地域交流会（幹事会）H26.12.20　於：高峰荘）

2　地域交流会の様子から

今年は知多地域が当番で、場所は篠島の「高峰荘」で行った。参与（校長や校長OB）も含め25名の参加者が有り、それぞれの地域や立場での情報交換が行われ、交流を深めることができた。また、学生の時に住んでいた下宿や行きつけの店、部活やアルバイト等の話に花が咲き、楽しい時間を過ごすことができた。最後には、全員で「花のかげ」を熱唱し、学生の頃を懐かしんだ。来年は、新城設楽地域が当番を受けていただく事を確認し、会を終えた。

《平成27年度県支部組織》

支部長		平手孝幸（名古屋55初）
事務局長		長尾　隆（名古屋57初）
地域幹事	名古屋	竹内義信（58初）
	尾張	竹谷竹久（54初）
	海部	平野　豊（56初）
	知多	山本　肇（56国）
	西三河	平岩康彦（58初）
	豊田･みよし	杉浦俊孝（58英）
	東三河	岩瀬雅洋（57初）
	新城設楽	後藤康仁（58英）

奈良県支部の近況

奈良県支部長　岡田善英

奈良県支部が設立されたのは平成６年12月11日であります。当時奈良県在住の卒業生は70名を数えていました。11月から有志の者が集まり、役割分担をして設立の準備をしました。そして当日は市内の中華料理店を会場に支部設立総会が開催されました。大学からは一木和男教授、同窓会本部から流石一夫副会長、吉川佳一理事様のご臨席を得て卒業生参加者25名の盛大な会となりました。この当時の様子は今も鮮明に覚えています。

そして、その翌年の１月17日にあの阪神大震災が起こったのです。新年早々日本中を震撼させた大地震は、関西地方に未曾有の被害をもたらしたのです。奈良県は直撃は逃れたものの会員の親類縁者に災害に遭われた方も多く、その後の復興、日常の繁忙も手伝って第２回の支部総会が開かれたのは、平成25年８月18日になりました。

この長い時間の中で、会員を取り巻く環境も大きく変化し、当時の青年も定年退職していました。

そして、設立当時の会員から支部活動の再スタートを望む声が高まり、今年は８月24日に第３回の支部総会を開きました。出席者は11名でありましたが、1958年度の卒業生から1994年度の青年まで、まさに老若男女が時の経つのを忘れて大学の思い出を語り合いました。

平成26年度支部役員

名誉顧問	瀧川　佳市	
会長	岡田　善英	
副会長	高橋　強	山本　泰彦
監事	石田　好庸	
理事	西尾八千穂	辻　明

支部総会・福田誠治新学長をお迎えして！

三重県支部長　**松本正美**

8月17日、ホテルプラザ洞津において、平成26年度（第9回）総会を開催しました。県外からの3名も含めて41名の参加があり、盛大に開催することができました。今後も多くの参加で支部を盛り上げていけるよう、特に来年度は支部設立10周年の節目でもあり、支部としての事業の企画も立てていきたいと考えています。

総会後の記念講演では、本年度は大学から福田誠治新学長をお招きして「『学修』から『学習』へ」と題してご講演いただきました。長年研究されたフィンランドをはじめとするヨーロッパの教育と日本の教育の違いを、資料や写真を交えながら詳しくお話をいただき、大変実のある講演会となりました。その後の懇親会でも、福田学長を囲んでテーブルごとに話に花が咲いたり、途中のスピーチ（出し物）では、懐かしい「花のかげ」の大合唱もあったりして、終始、和やかな雰囲気の中で進められ、親睦を深めることができました。

また、今年度は役員改選の年にあたり、一部改選し、新役員が承認されました。支部設立から運営にとご尽力いただきました中矢前会長には、顧問として、今後ともご指導をいただきます。

H26年度　三重県支部役員

顧　問	山本　征也	中矢　泰之
会　長	松本　正美	
副会長	福田　和幸	米岡久美子
監　事	近藤　澄子	海住　　壽
庶　務	六田　嘉郎	中田　善美
	田畑　繁行	松岡みつ子

最後に、大学理事会総会出席のため30数年ぶりに訪れた都留市や大学の大きな変遷を目のあたりにして、卒業生としての思いを新たにすることになり、母校や同窓会の益々の発展を祈念したいと思います。また、在学生との懇話会の資料作成等では、同窓会書記の関戸さんやキャリア支援センターの小林さんにもお世話になり、大変ありがとうございました。

第24回兵庫県支部総会

兵庫県支部副長　**仲野壽志**

平成26年度、第24回兵庫県支部総会を6月14日（土）に、西宮市で開催した。

「都留から脱出したヤマネの旅」と題して、ご講演をお願いした湊秋作先生は、西宮支部の会員で、現在キープ協会やまねミュージアム館長・関西学院大学教育学部教授としてご活躍。小さい時から虫を捕るのが大好き。田圃で泥んこになって遊んだ。「ヤマネを守ることは森を守り、環境を守り、さらにはことに人を守ることにつながる。」と語る。先生の思いには、子どもの頃の体験が息づいている。都留で学んだ学生時代や教職生活における共通の体験からも、親しみを覚え、人間の心に問いかけるお話が印象深い。

懇親会では、懐かしい都留での思い出話に花を咲かせ、同窓の絆を一層深め、楽しいひと時となった。会合の折々に、後進のご活躍を支援しようという声が高まります。いつものように学生歌「花のかげ」を合唱して盛会裏に終了した。

平成26年度役員

名誉顧問	赤穂　栄一		
顧　問	井上　弘和		
会　長	渋谷　訓生		
副会長	仲野　壽志	小林　怜子	後藤　純二
事務局長	高谷　和久		
事務局次長	武田　美紀	松尾　弘子	
会　計	川野　憲廣		
会計監査	牛尾　英俊		
各地区役員理事	三木　健司	北倉　一正	青木　芳信
	茶谷　紀元	苗村　道弘	中村　市衛
	中嶋　明美		
副理事	中山　貞二	大榎　恒年	辻奥　　彰
	網谷昭二郎	小林秀一郎	吉本　健治
	庄田　康夫		

37番目の京都支部

京都府支部長　**酒井好治**

「おめでとう、ありがとう」京都支部誕生の第一声です。支部長の【ことほぎ・感謝】の言葉で始まった設立総会は、福田学長、亀田同窓会長の挨拶へと続きます。まず学長の話がよかった。富士急線に『大学前』駅が出来、新宿から直通列車が走り、大学は広大なキャンパスと文化設備・運動公園に変貌していますと話し出されて、28名の会員一同、特に古きOB『今、浦島』の我々は、話の面白さと壮大な計画に夢見心地。時のたつのも忘れていた。つづいて同窓会長は学生たちが今、何に悩み、困っているかをつぶさに話され、「励まし応援してやって」と心からの熱いエールを送られ、同窓会魂を揺さぶられました。

議事は進み、やっと懇親会！待ってましたとばかりに自己紹介で皆、話すこと話すこと。まず、総会の記念品にと「京都土産」（手作り・ちりめん山椒）を全出席者に下さった人の話もよかった。次の「硬派中の硬派の下宿・黒部荘にいました」と話す人に、どっと歓声があがった。山小屋や河口湖ホテルでのバイト苦労話を語る方、卒業後も書道の道を歩み「書道甲子園」を熱く語った人、国宝・阿修羅像で名高い奈良興福寺で長年活躍中の方の話も良かった。出版社にお勤めで『百ます計算』の本を書かれた人、なつかしいクラブ活動と甘く切ない初恋を語る人など、実に多士済々だったが途中で時間切れ。続きは二次会へと移った。もちろん、自己紹介話は止まることはなかった。どなたも初対面の方とは思えないほど、楽しく盛り上げ上手な方ばかりでよかった。

印象的だったのは、仕事で遅くなったが急いで総会に駆けつけてくれた人（平成10年卒）。「私が初めて教員になった時の学校の校長先生は、あちらにおられる方（昭和45年卒）です」「あの時以来、初めて再会できて、うれしい。この総会のおかげです」と話されみんな大感激。拍手喝采。最高潮に盛り上がった。これだから同窓会はいい。老いも若きも一瞬で一つになれるのだから。これは吉兆。京都支部の幸先良し。現役、退職、どちらも教育委員会の方がおおぜいおられるのも心強い。

37番目と遅咲きの京都支部ですが、皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

滋賀県支部を結成 設立総会と懇親会を実施

滋賀県支部長　**松嶋孝雄**

滋賀県内の同窓生皆が渇望してきました積年の大きな思いが実を結び、滋賀支部が結成されました。設立総会当日（平成27年１月10日）には、学長の福田誠治様・同窓会長の亀田孝夫様のお二方が、遠路ご光来くださいました。参会者一同が大層感謝し、感激をいたしました。

設立総会では、福田学長様からは、フィンランドの教育の現状（特に指導実態や入試制度やその実施の様子）についてプレゼン形式で、お話をしていただきました。今後の滋賀教育が目指すべき方途を示唆いただいた思いがいたしました。

亀田同窓会会長様からは、設立総会用の冊子を使いながら、キャンパスの現在の様子を説明・紹介をしていただきました。また、同窓の方々の活躍ぶりを紹介していただきました。頼もしく・嬉しく思うと同時に自信が湧いてくる思いがしました。

午後１時ごろから、懇親会が始まりました。思い出話に花が咲き、本当に楽しい一時でした。

滋賀県支部役員

支部長	松嶋孝雄（昭和46年度教卒業）
副支部長	大澤　裕（昭和56年度国卒業）
会計監査	大橋雅子（昭和57年度教卒業）
	中村雅昭（昭和58年度教卒業）
事務局長	村田良文（昭和58年度教卒業）
事務局	齊城勝美（昭和59年度教卒業）
	片岡博義（昭和59年度教卒業）
	鳥飼雅一（昭和59年度教卒業）

人の絆に、感謝

広島県支部会長　**小谷桂司**

平成26年８月20日未明、広島市を襲った局地的豪雨による土砂災害。連日、被害状況が報じられ、同じ県人として、被害を受けた仲間のことを考えると心痛むばかりでした。

続々と集まるボランティアの人々・義援金。天災には無力な人間が、人の心による行動力・人の絆に感謝ばかりです。まだまだ十分な復興には至っていませんが、堅忍不抜の精神のみです。

こうした中、同窓会本部より広島県同窓会事務局に「10万円の義援金」を頂き、早速、広島県の窓口に郵便局経由で送金致しました。ここで、報告と感謝を申し上げたいと存じます。

支部活動は、少しずつですが、進めています。

毎年の４月の同窓会理事会。５月の模擬面接試験体験会の日に行われる同郷の在校生との懇談会に参加させて頂き、「人の絆」を語り、現状の広島県の教職員の大量採用の動向、卒業生の教員志望減少傾向に対し、お力になればと都留の地へ。

今年度も卒業した学生から「採用決定」のお手紙を頂きました。

乙未　羊が如く　一歳を
　　大地の恵み　共に活かさん
　　桂　歴代

平成26年度役員

顧問	金久睦彦	松田昌紀	中西正一	
会長	小谷桂司			
副会長	表　善彦	目崎仁志		
事務局長（兼：会計）	二宮　正			
理事	玉山　洋	田丸正実	宮本　仁	山城義明
	猪原憲三	本宮達弘	土橋義信	三永政幸
	池田桂子	島本智子		
監査役	五葉木輝正	白石　隆		
幹事	山中　護	田辺恵子	兼丸裕子	安藤正弘
	奥窪尚昭	末房朋子		

10周年記念誌発刊の岡山県支部

岡山県支部長　**原田直樹**

岡山県支部創立10周年目の節目を機に、足跡を後に続く方々に伝え、更には支部活動の発展につなげようということで記念誌を発刊することにしました。

学長様、同窓会長様からもご寄稿いただき目下編集中であり、今年度支部総会までに刊行予定です。

平成15年発足から地味ではありましたが活動を継続し、支部総会は毎年２月11日（建国記念の日）に固定して、岡山駅近くで開催してきました。平成26年度もその予定で準備を進めているところです。

上述のとおり、平成27年２月11日に支部総会開催の予定ですが、詳細は案内はがきでお知らせします。会場は岡山駅からの集まりやすさを考慮して公立学校共済施設「ピュアリティまきび」で行うようにしています。掲載の写真は26年２月の総会参加者です。昨年度を上回る参加を祈念しています。都留の思い出を語り合い、楽しい懇親のひとときを皆さんとともに過ごせたらと心待ちにしています。支部総会に懐かしいお顔をお見せください。若手の会員もぜひ参加してください。今後の岡山県支部発展のためには皆さんのお力添えが必要なのです。懐旧的敬老同窓会支部にだけはしたくありません。思い立った日が吉日です、それは「今でしょ。」

岡山県支部役員

支部長	原田直樹
副支部長	菱川　徹
理事	岩城孝志、坂上信二、
	中野元雄、土師康生
監査	川口與志継、岩崎美幸
事務局	岩城孝志、岡本智江、
	野﨑博子

支部総会・同窓会にて

鳥取県支部長　**金田吉治郎**

今年度も勤労感謝の日に支部総会と同窓会を開催しました。従来よりこの日と決めて行っています。若い人がたくさん参加した時もありましたが、全体が増えると同時に各年代の参加者があればまたおもしろいかなとも思います。とにもかくにも継続して開催しています。

懇親会での話を紹介します。私は近況ということではなく、在学当時の話をしました。当時無分別にも代用教員をしました。勝山中学校でした。そのために（？）留年しそうになりました。バスを降りて校門に向かうと中学校の校舎の向こうには、それは見事な富士山が覆いかぶさるように控えていました。富士の七変化です。代用教員の期間を終えると中学生が何回か都留に遊びに来たのを思い出しました。一度命拾いした三ツ峠山から観る絶景の富士も付け加えて話しました。大学紛争真っ盛りの時代で、都留も例外ではなく大学占拠で火炎瓶が飛び交ったなどの話をしました。参加者の皆さんには近況ということでお話をお願いしました。一部紹介したいと思います。

自分が在籍していた当時の運動部の仲間で前後合わせて７年間？の同窓会をしたこと。いくら歳を重ねても先輩後輩の関係は強かったという話がありました。退職後に取り組んでいることとして、農業、学校ボランティア、ジム通い、気ままに趣味を楽しむことなど。部活が同じだったことで現在もつながっていること。息子も都留文大。また、最後に鳥取支部初代会長の言として、自分は都留大２回生で、おそらく鳥取県では最初ではないか、当時の木造校舎の様子などという貴重なお話も伺うことができました。

また来年の再会を願って散会しました。時間と空間を飛び超えて、かつて身を置いた共通の世界にひたることができ、楽しいひと時を過ごすことができました。

広がれ、高知県同窓会の輪

高知県支部長　**前田志郎**

平成15年６月に高知県支部が誕生してから、今年で12周年を迎えました。大学においては、同窓生の少ない高知県ですが、支部誕生から脈々と同窓生の集いは続いております。今年は平成26年８月２日に県中央部にある越知町で支部同窓会を開催しました。今回の会場は、四国山地に源流を発し太平洋に注ぐ仁淀川のすぐそばでした。この川は、「水質日本一」を誇り、「仁淀川ブルー」と言われる澄み切った流れが美しい清流です。しかし、当日は台風の影響で風雨が激しく、会場の窓から見える川は濁流、増水により橋の欄干はたたまれ通行禁止となっていました。

総会では平成25年度活動報告、決算報告並びに平成26年度の事業計画が確認されました。併せて、出席者の近況報告があり、久々に会う同窓生同士、卒業年度は様々ですが、都留での大学生活を振り返りながら、和やかに語り合い親交を深めました。予定していた総会後の佐川町探索は台風のため中止となり残念でした。

私は昭和60年に英文学科を卒業したのですが、卒業以来、都留を訪れたことはありません。ただ、毎年この総会に参加することで都留での楽しかった日々を思い出しています。高知県から遠く離れていましたが、自分の周囲にはいつも温かく親切に支えてくれた先輩や友人がいました。卒業して何年経っても都留で過ごした時が鮮やかに蘇り、幸せな気持ちになるのはとても不思議です。同時に、都留で出会った仲間に感謝の気持ちでいっぱいになります。

そして、高知県支部総会では、都留文科大学卒業生という共通点だけで、すぐに打ち解け親しく話をすることができます。都留の不思議な魅力を改めて感じることができます。これからも県内同窓生が集い心和む支部総会になればと思っています。今後、高知県支部の輪が大きく広がることを願っています。

高知県支部役員（卒業年度）

○顧　問　清岡典代（Ｓ41）
○会　長　前田志郎（Ｓ49）
○副会長　東　明夫（Ｓ45）
　　上野典子（Ｓ41）
○理　事　久保茂行（Ｓ44）
　　今橋英二（Ｈ８）
　　岸本教恵（Ｓ59）
○監　査　石村一則（Ｓ51）
○事務局　田辺長美（Ｓ60）

（文責　田辺）

第17回支部総会報告

熊本県支部長　**永田好文**

昨年10月、２年に一度の県支部総会を開催しました。県内各地から18名の参加があり、その中に初参加者が４名いらっしゃいました。また、欠席者からも、たくさんのコメントをいただいており、その内容から、次回は参加者が増えそうです。ただ、気になるのが、ご本人や身内に体調を崩されている方が数名おられ、心から回復を願っています。

さて、今回は顧問（前会長）の倉岡康夫氏、会計担当の北口修氏がご逝去されたことから、冒頭に黙祷を献げ、開会に移りました。会則変更、会計報告の議事終了後、平成26年卒業の谷方寛裕氏に「都留文科大学の学生は今」と題して、ご講話をいただきました。大学の様子や学生の生活ぶりが、今と昔とではかなり違っていることを実感しながら、話に聞き入りました。余興では杉水修氏が軽快なタッチで奏でるプロ並みのアコーディオン演奏に、うっとりした気分になりました。次回は学生歌「花のかげ」と「武田節」の伴奏をお願いしました。きっと、盛り上がることと思います。

☆平成26・27年度支部役員

◆顧　　問　川口治夫（34年卒）
　　田山智晶（35年卒）
◆会　　長　永田好文（48年卒）
◆副 会 長　髙倉利孝　山辺健二（46年卒）

◆事務局長　田山智雄（元年卒）
◆会　　計　杉水修（62年卒）
◆会計監査　白木憲昭（48年卒）
　　藤掛久美（49年卒）

◆地区委員
○県北　松村誠一（43年卒）
○阿蘇　山辺健二
○熊本・宇城・上益城　杉水修　田山智雄
○八代　白木憲昭
○天草　髙倉利孝
○人吉・球磨・葦北・水俣　坂本彰（53年卒）

平成26年度鹿児島県支部総会を終えて

鹿児島県支部長　**本田武久**

平成26年度、鹿児島県支部総会を11月15日（土）、鹿児島市内のホテルで午前11時頃から開催しました。例年は夕方６時頃からのスタートでしたが、会員の高齢化等も考慮して、試験的に昼間に開催してみました。アトラクション（研修の一環として）では、朗読家＆シンガーソングライターとして全国的な活動を展開している「沢たまき」さんをお招きして、トークアンドソングの時間を設定しました。彼女の代表曲「もっときらきら」は、毎年東京の国立競技場で開催される「全国青年大会」の開会式の歌として歌われており、既に数カ国語に翻訳され、各国の交流の場等で活用されています。総会に参加したのは20名（最高齢は73才）でしたが、沢さんの笑顔と巧みなトーク、素晴らしい歌声と朗読。時の経つのを忘れる程の感動を受けました。研修の後は総会。役員選出、承認。会計報告等を行いました。続いては恒例の懇親会。都留での青春時代の思い出を一人ひとりが懐かしく語るとともに、近況報告を行い、交流を深めました。会員それぞれが「都留での学びと青春」が人生の礎となっていることを再認識することでした。残念ながら、厳しい就職状況、少子化等の影響もあり、卒業生が郷里に帰って教職に就けない現状で、後継者が減少しています。総会でも在校生に対するサポートに努めていくことを確認しました。楽しい一時（約４時間）は、あっという間に過ぎてしまいました。同窓会の更なる充実を願うとともに、次年度も元気で再会することを誓い合いながら散会しました。

◎平成26年度支部役員

支部長	本田武久（Ｓ43年度卒　国　文）
副支部長	植村和信（Ｓ45年度卒　初等教育）
副支部長	大山典男（Ｓ45年度卒　初等教育）

平成25年度都留文科大学同窓会会計収支決算書

◆収入の部　（単位：円）

項目	当初予算額	補正予算額	予算現額	収入済額	備考
入会金	3,985,000	0	3,985,000	3,985,000	797人× 5,000円＝3,985,000円
終身会費	7,970,000	0	7,970,000	7,970,000	797人×10,000円＝7,970,000円
繰越金	1,046,490	0	1,046,490	1,046,490	平成24年度繰越金
雑入	23,510	0	23,510	36,236	理事会・総会懇親会御祝儀、預金利息
収入合計	13,025,000	0	13,025,000	13,037,726	

◆支出の部　（単位：円）

項目	当初予算額	補正予算額	予算現額	支出済額	【見込額】　備考
事業費	7,065,000	0	7,065,000	6,462,959	
会報発行費	2,650,000	0	2,650,000	2,520,824	同窓会報第32号（平成25年度発行）
支部助成金	3,300,000	0	3,300,000	3,110,000	山梨　東京　神奈川　愛知　静岡　600,000円（@120,000円× 5 支部） 兵庫　長野　220,000円（@110,000円× 2 支部） 北海道　岩手　宮城　千葉　富山　岐阜 石川　福井　大阪　広島　茨城　1,100,000円（@100,000円×11支部） 山形　群馬　三重　島根　岡山　愛媛 徳島　鹿児島　720,000円（@90,000円× 8 支部） 鳥取　長崎　熊本　宮崎　沖縄(H24含)　400,000円（@80,000円× 5 支部） 高知　70,000円（@70,000円× 1 支部）
支部設立準備金	150,000	0	150,000		
新入学祝費	510,000	0	510,000	492,135	
支部旗作成費	55,000	0	55,000		
教員採用試験学習会費	100,000	0	100,000	60,000	宮城　千葉　東京　富山　石川　長野　60,000円（@10,000円× 6 支部）
被災地支援活動費	300,000	0	300,000	200,000	被災地支援金（岩手県、宮城県）
会議費	2,000,000	0	13,525,000	1,754,810	
総会費	500,000	0	500,000	326,590	
理事会費等	13,025,000	0	13,025,000	1,428,220	
同窓会本部費	1,950,000	0	1,950,000	1,439,257	
事務費	100,000	0	100,000	66,902	
運営費	1,500,000	0	1,500,000	1,068,092	事務費700,000円含む
慶弔費	240,000	0	240,000	194,263	入学式・卒業式祝い生花ほか
本部役員活動費	110,000	0	110,000	110,000	平成25年度役員報酬
積立金	2,000,000	0	2,000,000	2,000,000	大学創立記念事業基金 2,000,000円
予備費	10,000	0	10,000	0	
支出合計	13,025,000	0	24,550,000	11,657,026	

（収入済額）　（支出額）　（収入・支出差引残高額）

¥13,037,726　－ 11,657,026　＝　1,380,700

◎基金の増減

◆平成24年度末積立現在高	39,599,085円
◆平成25年度中積立金（財政調整基金、大学創立記念事業基金）	2,000,000円
計	41,599,085円

基金内訳

	9,602,425円
大学創立記念事業基金	31,996,660円
計	41,599,085円

体育会

平成26年度体育会
会長　白井誉也

陽春の候、都留文科大学同窓会会員の諸先輩方におかれましては益々御健勝のこととお喜び申し上げます。

平成26年度都留文科大学体育会スローガン「挑戦」の下、体育会本部並びに各部活精進して参りました。今年で41回目となる鶴鷹祭では目標としていた３年連続優勝を無事達成することができました。多くの部活で白熱した試合を繰り広げていましたが、中でもここ数年勝つことから遠ざかっていたラグビー部の圧巻たる１勝が３年連続優勝への架け橋となりました。

また陸上部のインカレ入賞をはじめ、多くの部活がリーグ昇格や各大会での入賞を果たすという喜ばしい一年でありました。このような結果を出すことができるのも諸先輩方が築いて下さった伝統とお力添えがあってと痛感しております。この強みを最大限生かしていく所存であります。至らぬ点は多々ございますが、今後とも、ご指導とご鞭撻の程、よろしくお願いします。

文化会

平成26年度文化会
会長　大橋輝士

春暖の候、都留文科大学同窓会会員の諸先輩方におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成26年度におきましては、文化会所属である合唱団が11月22日に行われました「第67回全日本合唱コンクール」におきまして、６年連続の金賞を受賞し、また、全国１位に相当する文部科学大臣賞も受賞し、大変優秀な成績を収めることが出来ました。これは、現役員の力の他、ＯＢ、ＯＧの先輩方のお力添えの賜物と、深くお礼申し上げます。

また、管弦楽団・吹奏楽部などの音楽団体の定期演奏会や、写真部・美術部の展覧会なども積極的に活動を行っています。

文化会本部におきましては、諸先輩方が築いて下さった伝統を引き継ぎ、各団体のさらなる発展を目標に、積極的に活動を行っていきたいと思います。

今後とも、都留文科大学同窓会会員の諸先輩方には、ご指導とご鞭撻のほどをよろしくお願いします。

創立60周年にあたって

副学長

阿 毛 久 芳

平成26年度より副学長となりました。新保祐司副学長とともに、福田誠治学長をサポートしています。大学を取り巻く状況は厳しいものがありますが、だからこそこれまで大学が培ってきた教育の良さを再確認し、新たな道への決意が求められているように思えます。

平成27年度は大学が都留短期大学として開学してから60年を迎えます。その記念事業を大学は企画していますが、その一つに『都留文科大学創立60周年記念誌』があります。私はその編集部会の部会長となっています。創立記念誌は今までに30年周年としての『都留文科大学記念誌』(平成元年十月）と『都留文科大学創立50年記念誌』(平成十六年二月）の二冊が刊行されています。

二冊は大学がいかなる歩みをたどってきたかを中心にしたものでしたが、今回は前の記念誌から10年と、比較的短い期間なので、むしろ現状を見つめ、これからを目指すという意味で、《未来へのヴィジョン》Today and Tomorrow of Tsuru University という表題を掲げました。

編集過程では三世代が都留文科大学の卒業生であるご家庭があること、名誉教授から多様な分野で活躍している多くの卒業生についての情報を得たこと、特に教育分野、研究分野においては改めてその実力の手ごたえを感じ、好奇心が刺激されました。これらの方々については「都留から社会へ、世界へ」という章で掲載する予定です。

ずいぶん前……20年以上も前かもしれません。私は学長の代理で山形県支部の「べにばな会」と岩手県支部の同窓会に参加したことがあります。学科を越えて、同窓生の方々が自分の過ごした学生時代をかけがえのない宝として大事にし、機軸としていると感じました。また岩手の会場となった北上市には現代詩歌文学館があり、『日本現代詩歌研究』の刊行委員として身近でした。「あの高嶺／鬼すむ誇り」という北上市の市民憲章の冒頭は、それ以来心に刻まれています。同窓会の各支部がそれぞれの誇りのもと、さらなる発展を遂げるようにお手伝いできればいいと思っています。

創立60周年を迎えて新たなる出発を

副学長

新 保 祐 司

今年は、都留文科大学創立60周年の記念すべき年にあたります。これを機に、これまでの輝かしい伝統をしっかりと踏まえて、更なる発展を期すべく、さまざまな手を打っていかなければならないと考えています。新たなる出発をするくらいの気持ちで臨まなければならないと覚悟しています。微力ではありますが、副学長として福田学長を全力で支えていく所存です。

いうまでもなく、今日の大学が置かれた状況は大変困難なものですが、都留文科大学も例外ではありません。

創立60周年記念事業期成会事業部会の運営を担当していますが、記念事業の一つとして位置づけしているものに、国際交流会館（仮称）の建設があります。国際交流をさかんにすることは、グローバル化の今日、大学の重要な使命です。しかしながら、本当はこれまで留学生のための自前の宿舎を持っていませんでした。平成28年３月の完成をめざして鋭意取り組んでいるところです。

建設予定地は、音楽研究棟の横の約二百坪の土地ですが、ここに４階建ての建物を造る予定です。48名の学生が住むことができ、留学生と日本人の学生が半々入ることになります。生活をしながら、クローバルな感覚を身につけてほしいからです。

国際交流としては、現在、カリフォルニア大学、セント・ノーバート大学、ラトガーズ大学（以上アメリカ）、クジャイナ大学（カナダ）、湘南師範大学（中国）、韓国外国語大学校（韓国）と交換協定を結んでいますが、このたび新たな交換先として、上海外国語大学（中国）が加わりました。更にオーストラリア、イギリスなどの大学にも拡げていきたいと考えています。

本学は、地方に在る大学ですが、地方に在る大学こそ、今日のグローバル化の世界と日本で活躍できる人材を育成する使命を持っていると思います。皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

空手道部55周年記念行事によせて

都留文科大学　昭和61年卒　**中 山 喜 人**

私の現役時代の話ですから、もう30年ほど前のことになります。都留文科大学空手道部創部25周年の集いが都留でありました。５年ごとにOBの先輩方が都留の町に集う伝統が空手道部にはあるのです。当時の会場は城山温泉、宿泊もできるそこに現役時代私が泊まったことはありませんが、お風呂として使わせて頂いたことは何度かあり、疲れた体を随分癒してくれたものです。

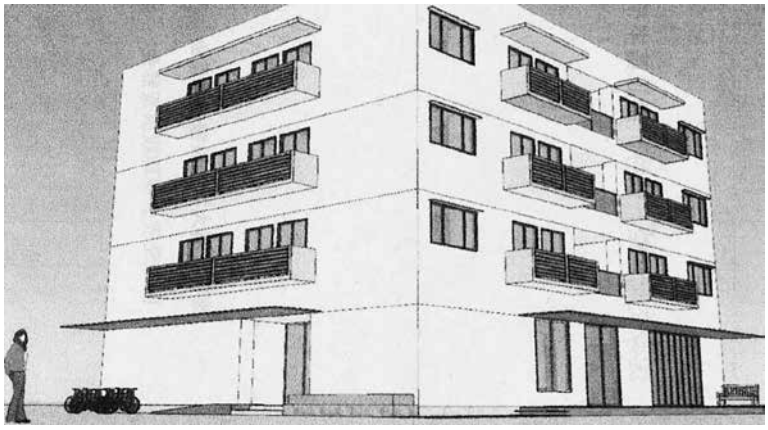
周年行事の集いは、OB会理事の先輩方と事前に何度も連絡をとりあい準備をすすめ、都留で先輩方を迎えるまで、現役部員として気の抜けない 緊張の日々が続きます。そして当日、多くの先輩方の笑顔とともに会はお開きを迎えるのです。

都留文科大学が４年制としてスタートした年から創部、大学と共に伝統を積み重ねて55年、その重さを、年々強く感じられるようになってきた私が、昨年の８月都留の町に今度は理事として集うことになりました。今回の場所は都の杜うぐいすホール。周年行事ごとに、大学施設が充実していくことに大きな驚きを感じる一方、懐かしい場所がどんどん変化していく様子が寂しくもあり、私が現役時代集った城山温泉も今はありません。でも、今の私があるのは都留で過ごした大学時代があったからこそ、そうあの緊張感があったからこそと、大学、そして空手道部への感謝の気持ちは変わりません。そう考えると、これからも現役の学生たちが緊張したこの時間をこの大学時代に持てるために、空手道部の周年行事が今後も続くよう力になれたらと感じています。

55周年行事の様子（うぐいすホール）

都留文科大学創立60周年記念事業への協力依頼について

都留文科大学創立60周年記念事業
国際交流会館（仮称）の建設



構造　鉄骨造４階建て
１階　ホール（学習室等区画可能スペース）
　　ホワイエ　囲炉裏コーナー
　　ゲストルーム
２階　学生専用階
　　４人室　４室　16人収容
３階　学生専用階
　　４人室　４室　16人収容
４階　学生専用階
　　４人室　４室　16人収容
Ｒ階　太陽光発電パネル

都留文科大学は、昭和28年４月に山梨県立臨時教員養成所として設立され、昭和30年４月都留市立短期大学に改編、さらに、昭和35年４月に４年生の都留文科大学へと移行し、短期大学から数えて平成27年度に創立60周年の記念すべき節目の年を迎えます。

この度、創立60周年という節目に当たり、これまでの本学の歴史を鑑み、諸先輩の輝かしい業績を称えるとともに、本学のさらなる飛躍と、新しい時代をたくましく生きる「文大生」を育成することを目指して設立された都留文科大学創立60周年記念事業期成会は、記念事業の推進に取り組んでおります。

記念事業の内容は、記念式典、記念祝賀会、記念事業、記念誌発行等です。特に、記念事業の主なものとして、本学の更なる国際化の進展を図るため、本学学生と留学生が共に暮らし、日常生活を通じて異文化交流を図ることによって、グローバルな人材を育成する教育寮としての機能を有する国際交流会館（仮称）を平成27年度に建設する計画です。

つきましては、同窓生の皆さんには、本趣旨をご理解いただき、母校のさらなる発展と次代を担う後輩育成のため、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

都留文科大学同窓会会長　亀田孝夫

氏名・住所等変更はホームページ・E-mail・郵便はがき・FAXで、お願いします

結婚・転居等により住所や氏名等を変更された方は、次の必須項目及び変更内容を、いずれかの方法のよりお知らせください。郵便はがきでの氏名・住所等変更届の場合は、はがきは自己負担でお願いします。

1　ホームページ

(1)本学ホームページより［卒業生の方へ］→［同窓会］→［同窓会氏名・住所等変更届け］にて行ってください。なお、詳しい変更方法については、ホームページ上に掲載してありますので、ご参照ください。
都留文科大学ホームページURL：**http://www.tsuru.ac.jp**

(2)ホームページ上にて氏名・住所等変更届けを行う際には、次のユーザーID並びにパスワードが必要となります。
パスワード：tbdh2206
（どちらも半角英数）※同窓会会員以外による不正使用がないよう、ユーザーID・パスワードの管理にはくれぐれもご注意ください。

2　E-mailにて送信
E-mail:dousokai@tsuru.ac.jp

3　FAX・郵送
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学同窓会　宛
TEL 0554-43-4341　内線206　FAX 0554-43-4347

◎必須項目	○変更内容
氏名（フリガナ）／旧姓 卒業年・学科	現住所／電話番号 勤務先名 勤務先住所／電話番号 勤務先の役職

※住所移転等で同窓会報がお手元に届かない場合がありましたらご連絡ください。

第23回都留文科大学同窓会総会のお知らせ

○日時　平成27年８月２日（日）午後２時　　○場所　都留文科大学２号館　101教室

同窓会会員の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

同窓会の事業である「在学生との懇話会」「模擬面接体験会」等、会員の皆様のご協力で充実したものになってきました。また、宮城県や東京都の支部独自活動から始まった教採対策学習会等の支援活動も各支部へと拡大しています。今年度も各支部より教採対策学習会の開催内容等が同窓会本部に報告されています。今後もさらに充実させていきたいものです。

学生への支援活動として平成26年４月には、教職支援センターが設立され、教員養成に関して資質・能力の向上をめざした体制ができました。教職課程カリキュラム、ＳＡＴ活動、教育実習、教員免許状更新講習、卒業生への教職支援など様々なサポートを行っています。

さて、各位の厚いご協力のおかげで、同窓会総会も重ねて23回目となりました。会員数も平成26年４月１日現在31,370名となり、各界での会員の活動も同窓会報にも見られるように素晴らしいものがあります。

第23回の同窓会総会には、全国から集まっていただく会員の皆様に良い思い出が残せるように、今回も富士五湖の花火大会（８／１～５）が行われる８月上旬の開催となりました。夏の思い出に同窓会総会に参加して昔を語り、夜は打ち上げ花火を見て帰りませんか。できる限り会員同士連絡を取り合い、大勢の参加を心よりお願い申し上げます。一人でも多くの同窓会員が出席して、盛大な総会が開かれることを執行部も大学当局も切に願っております。よろしくお願い致します。

英文学科50周年記念講演・式典

都留文科大学文学部英文学科は、1953年に山梨県立臨時教員養成所として始まり、都留市立都留短期大学の時代を経て、1960年４月に４年制の都留文科大学となった本学の３番目の学科として、1963年４月１日に創設されました。そして英文学科は、2013年で創設50周年を迎えることができました。そこで、英文学科は年度末の2014年３月15日に、創設50周年記念行事を行いました。

式典は、２号館101教室にて、15時から実行委員長の儀部直樹教授司会のもと執り行われました。竹島達也学科長からの挨拶からはじまり、福田誠治副学長（当時）、同窓会長の亀田孝夫氏からご祝辞を頂いたあと、今井隆教授から『記念論集』の紹介がありました。その後の記念講演は、加藤祐三学長（当時）に、『黒船来航と洋学』と題して、１時間ほどお話し頂きました。16時30分からは、１号館215教室に移動し、鷲直仁教授の司会による祝賀パーティーが開かれました。記念行事の運営を手伝った英文学科の学生達を紹介をした後、前同窓会長の千野文雄氏による祝杯、前々同窓会会長の小林孝次氏による乾杯を頂き、歓談は18時まで和やかに続きました。

以下に参加学生（当時３年生）の言葉も合わせて掲載させていただきます。

私は主にパーティーの手伝いとして、50周年記念の行事に携わることができました。当日、会場への誘導係をしていたとき、まるで知らない世界に来たかのように辺りを見回している方、校舎の写真を撮るのに夢中になっている方を多く見かけました。話を伺ってみると、大学のあまりの変わりように驚いているということでした。しかし、たとえ大学が変わっていようと、この都留文科大学が好きだという気持ちは、どの方にも変わりないのだと感じました。そのような素敵な卒業生たちと一緒にお食事をし、会話を楽しみ、とても貴重な時間を過ごすことができました。日本全国から学生が集まるこの大学では、卒業後、離れ離れになることも珍しくはありません。そのような中、学生時代の友人や先生と何十年かぶりに再会し、嬉しそうな表情をされていた卒業生の方々を見て、この大学は素敵な大学だと、改めて思いました。

（英文学科　相澤雄介）

加藤前学長講演

祝賀パーティー

表紙（田原の滝）
写真提供　浅川　博氏